国立寺泊療養所建設

埋蔵文化財発掘調査報告書

桐原石部神社御廟所

1980

新潟県教育委員会

国立寺泊療養所建設

埋蔵文化財発掘調査報告書

桐原石部神社御廟所

1980

新潟県教育委員会

序

本書は、国立寺泊療養所移転建設工事に伴い，昭和54年度に新潟県教育委員会が調査主体となって実施した，三島郡寺泊町下桐所在桐原石部神社御廟所の発掘調査の記録である。

本御廟所の調査では，主として江戸時代の遺構・遺物が検出され，当時代の精神文化の一様相が明らかになった。

近年，中・近世考古学研究の機運が高まりつつあるが，本調査の成果が今後の研究の一助となり，また延喜式内桐原石部神社はじめ古代史研究にも資するところがあれば幸である。

なお，多大の御協力・御援助を賜わった寺泊町・寺泊町教育委員会・桐原石部神社の各位に対し，ここに深甚なる謝意を表する次第である。

昭和 55 年 3 月

新潟県教育委員会
教育長　久 間 健 二

例　　言

1．本報告書は，新潟県三島郡寺泊町大字下桐字五社833番甲所在の，桐原石部神社御廟所の発掘調査の記録である。

2．本遺跡の発掘調査は，新潟県教育委員会が主体となり，昭和54年12月24日から同月28日まで実施した。

3．発掘・整理等一連の作業は，新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係職員があたった。

4．発掘調査に際して出土した遺物は，「五社山」と記入の上，一括して新潟県教育委員会が保存管理している。

5．本報告書の執筆は分担執筆とし，各項文末に執筆者名を記した。編集は，調査担当者があたった。

6．本調査に関連する資料を〔付編〕として掲載した。

7．本報告書の作成に際し，下記の諸氏・機関から御指導・御助言・御協力を賜わった。　（敬称略・五十音順）

竹内　武・新潟県総務部県史編さん室・新潟県立図書館・桃　裕行・山崎完一。

目　　次

Ⅰ　序　　説……1

1．調査に至る経緯

2．発掘調査の経過

Ⅱ　環　　境……4

1．地理的環境

2．歴史的環境

Ⅲ　遺　　構……8

1．外部形態

2．層　　序

Ⅳ　遺　　物……10

1．縄文土器・石器

2．土　師　器

3．土師質土器

4．銭　　貨

5．鍍金金具

6．石　　祠

Ⅴ　総　　括……13

――下桐所在桐原石部神社御廟所の造営年代――

〔付　編〕『新潟県神社寺院仏堂明細帳』……17

挿　図　目　次

第１図　遺跡周囲地形図……3
第２図　遺跡周辺の地形模式図と遺跡分布……5
第３図　遺跡周辺の地形図と城館跡・塚の分布……7
第４図　土地更正図……8
第５図　遺構平面図・土層図……9
第６図　石器実測図……10
第７図　基盤部地形図・遺物分布図……10
第８図　土器実測図……11
第９図　銭貨拓影図……12
第10図　鍍金金具実測図……13
第11図　桐原石部神社蔵古地図 (1) ……14
第12図　桐原石部神社蔵古地図 (2) ……15

図　版　目　次

図版Ⅰ　遺跡遠景・遺跡近景
図版Ⅱ　発掘調査前（１）・発掘調査後（１）
図版Ⅲ　発掘調査前（２）・発掘調査後（２）
図版Ⅳ　発掘風景（１）・土層状態
図版Ⅴ　発掘風景（２）・遺物出土状態
図版Ⅵ　遺　物（１）
図版Ⅶ　遺　物（２）・石祠

Ⅰ　序　　説

1　調査に至る経緯

新潟県三島郡寺泊町金山に所在する国立寺泊療養所は，施設の老朽化にともない移転・新築することとなり，寺泊町長は同療養所長より昭和54年９月20日付けで用地の取得及び造成事業の開発計画に係る依頼を受け，用地として同町下桐字五社を選定した。

しかし，当該用地内には桐原石部神社御廟所があり，これが塚状を呈するところから，未周知ながら埋蔵文化財包蔵地ではないかとの推測が町教育委員会でなされた。９月27日，たまたま同町出張中の戸根与八郎学芸員は，町教育委員会吉井　功社会教育係長から，この件について現地確認の要請を受け，その取り扱いについて至急県教育委員会と協議するよう指導し，11月20日付けで寺泊町長より協議文の提出があった。

これを受けて，部内において開発行為の可否について検討したところ，地域的な歴史性・周辺遺跡の調査状況から，当該地が延喜式内桐原石部神社跡である可能性が考えられるに至り，12月19日，県教育委員会は現地確認をおこない，町教育委員会との間で，本件については慎重に対処すべきことを確認した。

以上の経過をふまえ，まず確認調査を早急に実施し，その結果のいかんによっては開発行為自体に再協議を要する事態もありうることを前提として，12月21日，吉井社会教育係長の来庁を求めて確認調査の体制・日程等を協議した。協議の結果，昭和54年12月24日より12月27日の間，下記体制で調査を実施することとし，文化庁文化財保護部の承諾を得た。

（波田野至朗）

調査主体	新潟県教育委員会　（教育長　久間健二）		
管　理	総　括	南　義昌	（県教育庁文化行政課長）
	総括補佐	関　和彦	（県教育庁文化行政課長補佐）
	庶務管理	近藤信夫	（県教育庁文化行政課副参事）
	指　導	金子拓男	（県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長）
	庶　務	獅子山隆	（県教育庁文化行政課主事）
	〃	伊藤和子	（　〃　）
調　査	調査担当	波田野至朗	（県教育庁文化行政課学芸員）
	調査員	稲岡嘉彰	（県教育庁文化行政課文化財主事）
	〃	戸根与八郎	（県教育庁文化行政課学芸員）

調　査	調査員	藤巻正信	（県教育庁文化行政課学芸員）
	〃	齊藤基生	（　〃　）
	〃	佐藤則之	（　〃　）
	〃	高橋　保	（　〃　）
	〃	折井　敦	（　〃　）
	〃	北村　亮	（県教育庁文化行政課嘱託）
	〃	田辺早苗	（　〃　）

協　力　寺泊町教育委員会　（教育長　広田広四）

当銀敏雄（公民館長）・吉井　功（社会教育係長）

田中正明（主任）　・小潟　譲（主事補）

寺泊町商工観光課　（課　長　荻原一雄）

外山辰司（観光係長）・山田昭夫（企画開発係長）

柄沢　博（主事補）　・早川裕幸（主事補）

桐原石部神社　（氏子総代　中島甚一郎）

大矢鎮夫（下桐区長）・早川甚四郎（神社世話役）

佐藤政市（有志）　・近藤貫次（有志）

2．発掘調査の経過

発掘調査は，御廟所を中心に100㎡を対象とし，東西・南北を軸として4分し，ＮＥ区・ＮＷ区・ＳＥ区・ＳＷ区とした。本件は時代等の確認を目的としたものであったが，調査の過程で古代まで溯古しないことが判明したため全面発掘に変更し，12月28日までを要した。

12月24日（雪）　現地着。調査員・町及び桐原石部神社関係者が参集して，御霊鎮めの祭礼を行う。平面図の作成・現状の写真撮影を経て，ＳＥ区より発掘を開始する。

12月25日（みぞれ）　ＳＥ区・ＳＷ区・ＮＷ区発掘。盛土中から，石祠扉片・寛永通宝出土。寺泊町広田広四教育長・荻原一雄商工観光課長来訪

12月26日（晴）　ＮＥ区・ＮＷ区・ＳＷ区発掘。盛土中から寛永通宝・文久永宝が，基盤層上から土師器片が出土。ＥＷライン東半の土層図を作成。

12月27日（雨）　ＮＳライン・ＥＷライン西半の土層図を作成。盛土中から縄文土器片・石器・寛永通宝・鍍金金具片等が出土。

12月28日（みぞれ）　遺構基盤部を精査・平面図を作成し，現地調査を終了する。

（波田野至朗）

第1図　遺跡周囲地形図

1．横滝山廃寺跡　　2．舞　台　塚
3．下桐・桐原石部神社御廟所　　4．下桐・桐原石部神社

II　環　　境

1．地理的環境

蒲原平野を緩やかに蛇行しながら北上する信濃川は，寺泊町大河津付近で本流と分かれ，分水流新信濃川となって日本海に注ぐ。この新信濃川と日本海に挟まれた地域が，室町時代以降に古志郡西古志とよばれた所の北半で，現在の三島郡寺泊町・和島村・西蒲原郡分水町の一部に該当する。この地域のほぼ中央を流れる島崎川の両側には，標高約80～90mの西山丘陵と曽地丘陵が併走している。西山丘陵はさらに北へ延びて国上山・弥彦山・角田山へ続き，曽地丘陵は次第に高度を下げながら大河津付近で蒲原平野に接している。

この周囲一帯は背斜構造によって構成されており，丘陵の連なりや河川の流れは南南西～北北東の方向を示している。これは石油構造ともいわれ，かつてこの近辺は尼瀬・西山の両油田に代表される油田地帯であり，日本有数の産油量を誇っていた。

島崎川は出雲崎町田中に源を発し，寺泊町小豆曽根で新信濃川に注ぐ，延長18.3kmの河川である。この川はかつて西川に合流しており，夏戸から鰐口・竹森に至る下流地域は，常に湛水に悩まされたという。江戸時代までは下流域に円浄寺潟に代表される多くの潟湖が形成されており，現在小豆曽根などにみられる「潟端」という地名などから，当時の地形が想起される。集落は沖積地に接した島崎川及び支流谷口などの丘陵辺部に散在しており，中には寺泊町木島のような沖積地内の独立丘に寄るものもある。

本御廟所は，曽地丘陵が蒲原平野に突出した北端付近にあたり，それが北西から入る小谷によって分割状態に近くなった部分の南端に位置している。本地点は，南に向ってわずかに傾斜しているもののほとんど平坦であり，標高約30m・対沖積地高約20mを測る。周辺丘陵上は，杉・松等の造林地もあるが，ほとんどは雑木林である。本地点は造林地にあたる。

（北村　亮）

2．歴史的環境

本御廟所周辺の丘陵や沖積地には，縄文時代以降の遺跡が数多く点在している。江戸時代の文化年間に橘　茂世が著した『北越奇談』の中にも，三島郡内の遺跡に関する記事がみえ，早くから当地域の遺跡が人々に知られていたことがわかる。第2図に示した遺跡は，おもに土師器・須恵器の包含地であるが，ほとんどは発掘等の詳細な調査は行なわれておらず，正確な時期を捉えることはできない。

地2図　遺跡周辺の地形模式図と遺跡分布

1．竹が花遺跡　2．弁才天窯跡　3．横滝山廃寺（1976年，寺泊町教委発掘）

4．松葉遺跡　5．五千石溜遺跡　6．五分一稲場遺跡（1977年，県教委発掘）

7．夏戸窯跡　8．北辰中学校遺跡　9．長者原遺跡　10．梅田遺跡

遺跡の分布は島崎川流域ことに右岸に顕著である（第2図）。その立地をみると，横滝山

周辺で一部沖積地に立地しているが，そのほとんどは標高10m前後の微高地や自然堤防上及び丘陵地が沖積平野と接する部分，特に西山・曽地両丘陵の小谷が島崎川の沖積地へ出る開口部の緩斜面に立地している。これは，生活の基盤であった農業生産活動の場となり得る，島崎川の沖積地及び後背の小谷と密接な関係があると思われる。

当地域は，律令時代において越後国古志郡の一部であったと推定されている。持統天皇3年(689)～6年(692)の間に「コシ」を越前・越中・越後の三越に分立し，その後大宝2年(702)に越中国4郡を併合している。〔註1〕この4郡とは，頸城・魚沼・古志・蒲原とするのが通説になっており，この時点で越後国の境域は後の出羽国を除けばほぼ定まったと考えられる。

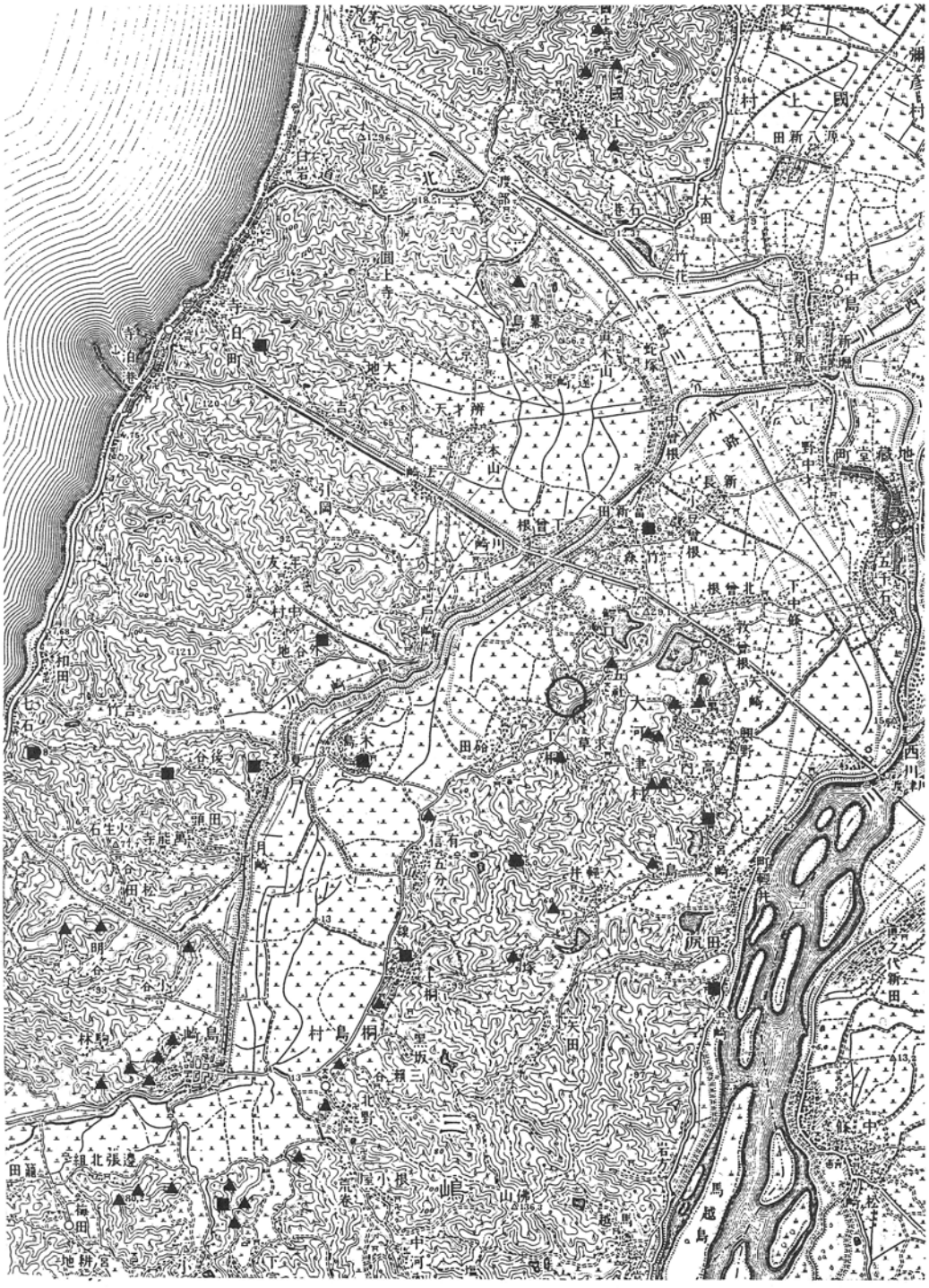
越後国古志郡に関する記録のうち，桐原石部神社の名が初見されるものとして『延喜式』があげられる。これには，北陸道の大家・伊神・渡戸の3駅及び三宅神社・桐原石部神社・都野神社・小丹生神社・宇奈具志神社の五社六座が記されている。大家駅は『倭名類聚抄』に見られる大家郷と同所と思われ現在の出雲崎に，伊神駅は寺泊に比定されている。また，都野神社は与板（伝大家郷吉川庄）に，小丹生神社は和島村島崎に，宇奈具志神社は和島村乙茂にそれぞれ比定されている。しかし，桐原石部神社については現在寺泊町下桐と和島村上桐に存在しており，両者のいずれかもしくは全く別の地であったのか結論は出ていない。いずれにせよ，古志郡中の式内五社六座のうち4つまでが島崎川流域にあることや，須恵器を出土する遺跡が古志郡中の他地域と比べて圧倒的に多いこと（金子拓男　1976），横滝山に瓦葺きの建物の存在が考えられること（寺村光晴　1977）などから，当地域が古志郡の中心的地域であった可能性が考えられる。

第3図は新信濃川開削前の明治44年測量の地図に，中世城館跡と塚の分布を併示したものである。城館跡はほとんどが室町時代のものと思われるが，同一時期に存在したわけではない。これを見るとその立地は，一部を除いて集落裏手の丘陵先端部もしくは沖積平野中の自然堤防上であり，水田経営も含めた領地支配とも無関係ではなかったと考えられる。

交通についてみると，『延喜式』における北陸本道は越前・加賀・越中・越後の国府を通り，寺泊を経て佐渡に至っている。寺泊町渡部にその位置が比定されている渡戸駅〔註2〕には，船2隻のみが置かれているが，『延喜式』にみえる船のみの駅（水駅）はここだけであって，佐渡へ渡る駅とも考えられている。その後，江戸時代までに寺泊から弥彦・福島・赤塚を経て新潟まで北陸道の延長がなされているが，当地内における北陸道は，第2図の遺跡分布及び第3図の城館・塚の分布から，古代からほとんど変わることなく曽地丘陵の西側を通っていたと考えてさしつかえないであろう。　（北村　亮）

註1　『続日本紀』　文武天皇大宝二年三月十七日条

註2　『延喜式』　巻二十八



第3図　遺跡周辺の地形図と城館跡・塚の分布
（国土地理院「三條」1:50,000原図 大正3年発行）

Ⅲ 遺　　構

1．外部形態

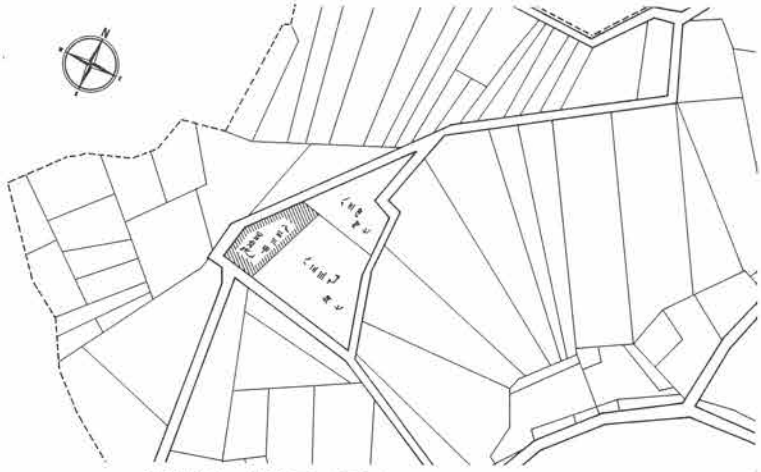
御廟所の外部形態は，長方形の壇状部と，そのほぼ中央に位置する円形の小丘部からなっていた。壇状部は，東西6・7m・南北 8.0m・周囲との最大比高差（東側）0.55m・最小比高差（西側）0.2mを測り，小丘部は，直径2.5m・壇状部との比高差0.5mを測った。

御廟所の中軸は，東西南北の各方位に合致し，南面して参道があり，かなり意図的に設けられたものであることが知られる。また，領域の南辺と西辺は道によって規制され，東辺は畑地によって画され，これは第4図の示すとおりであるが，壇状部北辺は領域の北辺とは一致せず領域の中程にある。領域はすなわち神域であるが，壇状部と，領域北半の低部が，それぞれいかなる役割をもつものか，伝承等は遺存していない。

小丘部の上には石祠（図版Ⅶ－8）が奉載されており，御廟所の主体部と考えられる。

（波田野至朗）

2．層　　序



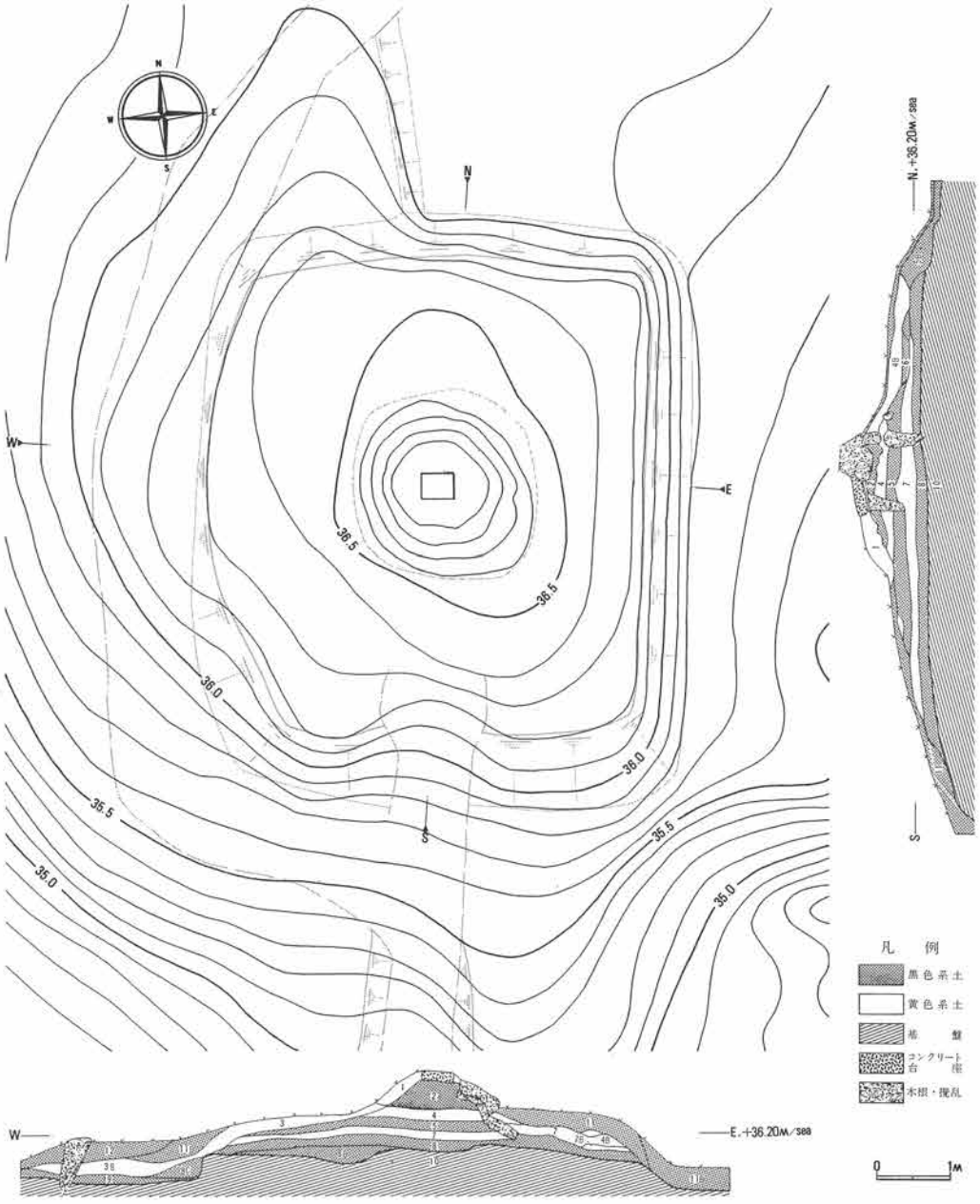
第4図　土地更正図（明治44年調整図より作成）

確認できた土層は19層であったが，非常に近似するものを除くと12層となる。（第5図）これらの土は，大別して黒色土系と黄色土系に分けることができ，2系統の土が交互に堆積していることが観察できる。これらのうち，8・8B・10の各層は御廟所形成以前の自然堆積土，9層は形成直後の自然堆積土，3B・8C・11B・12の各層は盛土崩壊土，無番号層は現表土であり，それ以外が残存する盛土である。

盛土は，壇状部と小丘部との間に切れめなく盛られており，一連の作業として壇状部と小丘部とが同時に形成されたことがわかる。ただし1層は，現表土上に盛られており，他の

黄色系土とは全く異なる明るい色調・軟粘性を呈するところから，近年盛られたものと推定される。恐らく，樹木の成長とともに傾いた石祠を支えるためと，小丘部の補修を目的としたものであろう。

（波田野至朗）



第5図　遺構平面図・土層図

Ⅳ 遺　　物

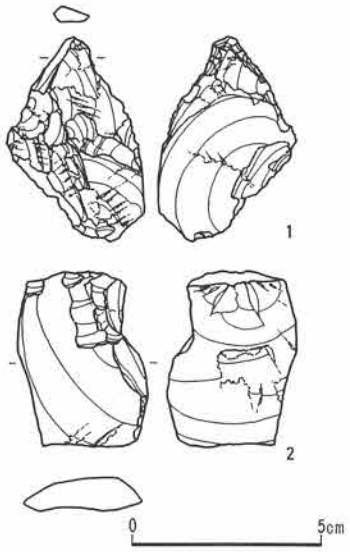
1．縄文土器・石器

縄文土器　胴部の細片で，赤褐色を呈する。器面が磨滅しているため，中～後期ごろの所産ではないかと推定される以外，詳細は不明である。

石錐（第６図－１・図版Ⅵ－１）　横長の剝片を素材としている。正面は先端部にごく僅かの調整痕を認めるのみで，裏面からの調整が主である。先端部の横断面が扁平なため，石錐としての鋭さを欠く。

剝片（第６図－２・図版Ⅵ－２）　打角115度を測る縦長剝片で，末端は折損している。使用痕は認められない。

（齊藤基生）

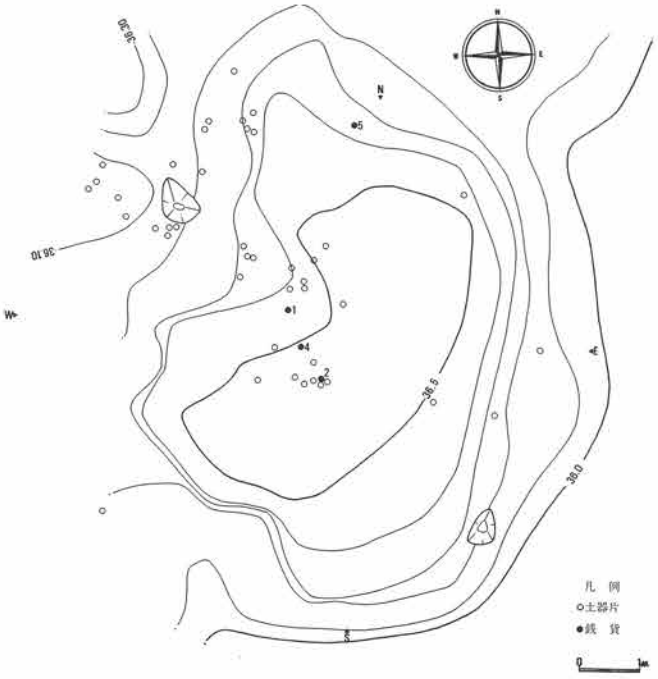


第６図　石器実測図

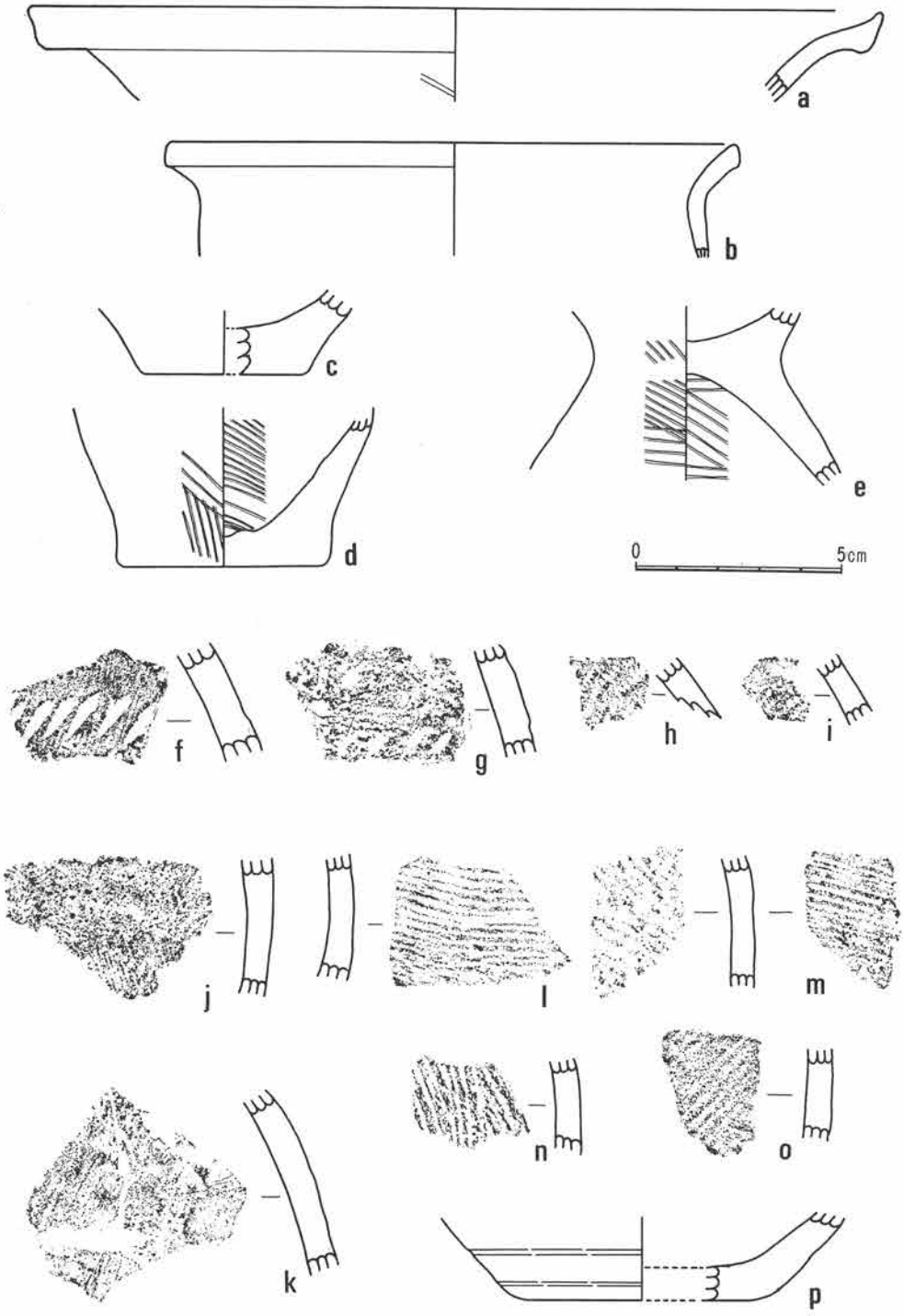
2．土師器（第８図－a～０・図版Ⅵ－３～16）

何れも盛土下の８～８Ｂ層からの出土。細片であるため器形の知りうるものは数点しかない。胎土は全般に粗く，砂・砂礫を混入している。

ａは推定口径20.5cmの甕で，口縁端部が面をもち，頸部外面には刷毛目の整形痕が，頸部から胴部にかけては炭化物の付着が認められる。ｂは推定口径13.5cmの甕口縁部で，端部に面をもつ。ｃは底径４cmの底部片で，縦なで痕が認



第７図　基盤部地形図・遺物分布図

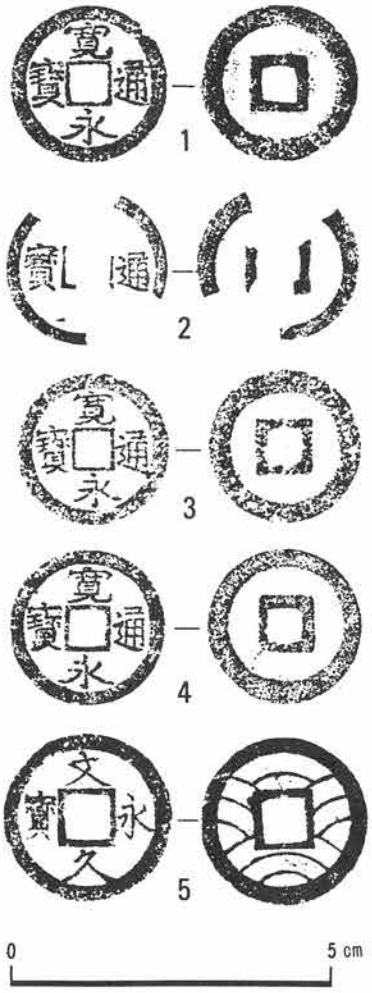


第8図 土器実測図

められる。d はやはり底径５cmの底部片で，内外両面に刷毛目整形痕があり，内面は黒色を呈する。e は高杯脚部片と思われ，内外両面に比較的荒い刷毛目整形痕がある。f とｇの外面には，刷毛による整形の後に斜行刻み目を施している。h とｉは，外面が黒褐色を呈し，LR 縄文が施文されている。同一個体片と思われる。ｊ～ｌは，外面に炭化物が付着していることから，甕の胴部破片の可能性があり，O もこれに近似している。何れの外面または両面にも刷毛目整形痕が認められる。

出土の土器片には弥生終末期的なものもあるが，全般的に石川でいう月影Ⅱ式に相当する古式土師器と考えられる。

（田辺早苗）



第９図　銭貨拓影図

３．土師質土器（第８図－Ｐ・図版Ⅵ－17）

底形６cmの杯底部である。内外両面に横なで整形痕が認められ，硬質である。中世の所産であろう。

（田辺早苗）

４．銭　貨（第９図・図版Ⅶ－１～５）

盛土５・７層から寛永通宝４枚が，盛土崩壊土の５Ｂ層上面から文久永宝１枚が出土している。

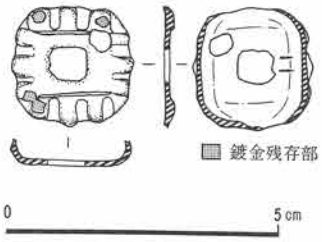
１は寛永14年（1637）鋳造の仙台銭，２は同年鋳造の岡山銭，３は寛永16年（1639）の井之宮銭，４は明暦２年（1656）の沓谷銭と推定され，何れも江戸時代前期に鋳造された古寛永通宝に属する１文通銭である。

５の文久永宝は，文久３年（1863）に江戸浅草銭座または江戸東大工町銭座で鋳造された江戸時代後期の４文通銭である。

（波田野至朗）

6．鍍金金具（第10図・図版Ⅶ－6）

2層より出土。現状は隅丸方形であるが，欠損しているため全容は知り得ない。中央に孔があり，縁辺部に舌状の打ち出しがある。銅製で鍍金されており，祭祀用具片と思われる。　（波田野至朗）



第10図　鍍金金具実測図

7．石　祠（図版Ⅷ－8）

小丘部上に奉載されていたもので，本調査に先立ち御廟所参道の中程に移設されている。凝灰岩製で，高さ24.0cm・間口24.0cm・奥行10.8cmを測り，基壇・室・屋根の3つの部分から成っている。基壇には，正面に階段を・縁の回りに高欄を作り出している。室は正面及び両側面を開き，正面には両開の扉が付き，柱・梁が彫出されている。なお，扉の一方は，盛土の2層上面から出土している（図版Ⅶ－7）。屋根は基本的に入母屋造りであるが，屋根正面の流れの上面に，切妻のいわゆる千鳥破風を，また正面及び両側面は軒唐破風で飾っている。造りは総じて精巧で，基壇の一部が割れているものの風化も少なく，遺存度は良い。

（北村　亮）

V　総　　括

――下桐所在桐原石部神社御廟所の造営年代――

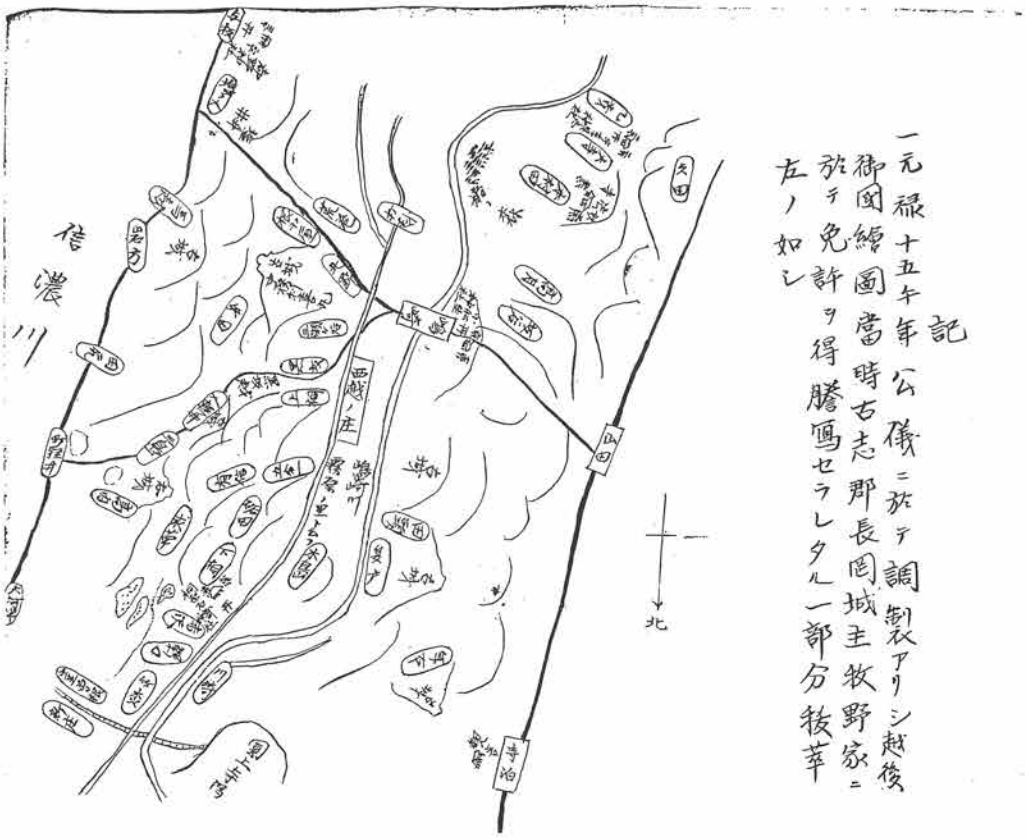
本御廟所の構造は，発掘調査によって知られた限りでは，方形壇状の平坦地を盛土と周辺の削り出しによって構築し，その一連の作業として中央に小丘部築き，小丘部上に石祠を奉載し，石祠の背後に松樹を伴なうことによって構成されていた。方形壇状部の各辺には榊がめぐっておりこれが磐境・小丘部及び石祠が神籬・松樹が憑代にそれぞれ該当するものであろう。本御廟所の形状が造営当初から現状のようであったかは，発掘調査からは不詳であるが，東側の開墾による整形や，西側の堆積土は，削土による御廟所の形状の変容を推測させる。ちなみに日野資徳氏は，本御廟所の旧状が「周圍弐拾間餘ノ大塚ニテ老松老桜繁茂」しており「御キヤウ塚」と呼称されていたが，「明治八年周圍開墾ノ際採木シ塚上ヲナラス」ことによって変形したことを記録している〔註1〕。

調査結果と日野資徳氏の記録とを照合すると，遺構は削土後新に築かれたものではなく当初の「御キャウ塚」の意図的な残存部であるとすることができよう。

本御廟所の造営は，下層盛土である５層及び７層からの寛永通宝の出土により，上限が最も新しい鋳造年である明暦２年（1656年）であり，下限が新寛永通宝の大規模な流通を考慮するとその鋳造開始の寛文８年（1668年）以前であった可能性がある。文久永宝の出土は，表土に近接した崩壊土５Ｂ層上面からであり，下限の比定資料とはしにくい。

文献資料については，宝暦９年（1759年）に当該地に「大塚」が存在していたというものがあるようであるが〔註２〕、原資料が不明であり確認できない。また慶長２年の「西古志郡下桐原村御検地帳」・慶長３年の「山東郡西古志郡之荘ノ内下桐村御検地帳」〔註３〕における村名の変遷や，神社・御廟所の状態等についても，同検地帳が調査しえない状態にあるため確認できない。また，元禄15年（1702年）に製作したとされる古地図（第11・12図）には，「延喜式内」・「御廟所」等がみえるが，字名・方位等から明治10年代末の地租改正時に作成された可能性が大きく〔註４〕、本地図の内容はそのまま採用できない〔註５〕。

石祠は，その製作が江戸時代中期以前には溯りえず〔註６〕、明治16年（1883）に提出された『神社明細帳』に記載されているものの規模よりかなり小さい〔註７〕。神社関係者の口碑



第11図　桐原石部神社蔵古地図(1)

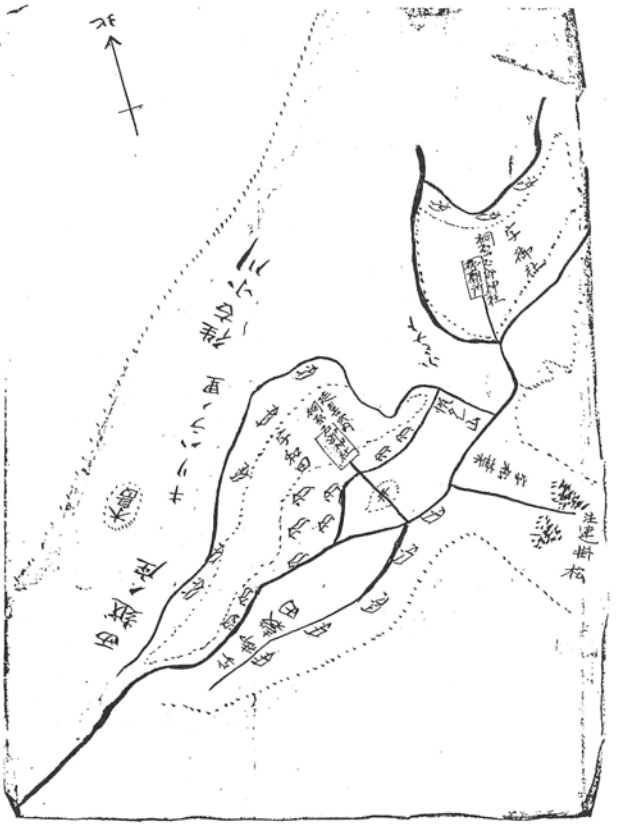
では，明治16年当時「木祠」であったものを意図的に「石祠」と届出，大正末年ごろ腐朽により現石祠に取り替えたという〔註8〕。

以上によれば，御廟所の造営年代を推定する根拠となるものは考古資料のみというのが現状である。本地における御廟所の形成に，土師器や中世土師質土器等の出土もあるので，さらに溯古する可能性は残るが，現廟所の造営は江戸時代前期後半・1660年頃を上限になされたもので，直接延喜式内社の遺構と結びつくものではないと考えられる。「御キョウ塚」が現御廟所と一致するものであるか否かは推測の域を出るものではないが，現在形・記録・周辺の塚の分布から同一のものとみられる。

また，塚上に当初から祠があったか否かは確証がない。樹齢60余年の松樹についても，植樹した桜が自生した松に淘汰されたためこれを神木とした〔註9〕ので，削土されたこともあろうが，当初からの憑代の存在は不詳であり，当時の祭祀形態は知り難い。

桐原石部神社の成立は，この社名が『延喜式』にみられるところから，10世紀前半以前に溯古することは確実である。本地域はII章で触れたように，当時古志郡のうちと考えられ，島崎川下流域一帯を「キリハラノ里」と呼んでいるところから，式内社はこの一帯に存在していたものとみることができる。現在この地で桐原石部神社と称する社は，ここ寺泊町下桐と，隣接する和島村上桐にあり，いずれが「延喜式内社」であるかをめぐって論争が続いた。『神社明細帳』の記載内容〔註10〕や・このたび調査した御廟所の改造・山陵祭〔註11〕などは，当時の共同体の事情を背景としたものではあるまいか。

ともかく，延喜式内桐原石部神社比定地問題は，越後国の成立・北越開発と駅制・横滝山廃寺などを含む総合的な見地からの検討が，今後も続けられることが望まれる。



第12図　桐原石部神社蔵古地図(2)

（波田野至朗）

註1・2・3　『桐原石部神社御由緒書逐條按文』（新潟県立図書館蔵）

註4　昭和56年2月19日，阿部洋輔氏御教示。

註5　牧野家原図は現在発見されておらず，比較できない。

註6　昭和55年1月14日，山崎完一氏御教示。

註7　「一、石祠　間口貳尺三寸三分，奥行貳尺三寸」，史料現称『新潟県神社寺院仏堂明細帳』（新潟県総務部県史編さん室蔵）

註8・9　昭和55年12月15日，早川甚四郎氏御教示。

註10　両社提出の『神社明細帳』には，ともに「延喜式神明帳ニ記載ノ當社タル旨」等と朱書加筆され，届出時の「式内」の二字は削除されている。当時の新潟県社寺掛は，両社双方について式内社比定を避けている。

註11　「五月十五日　山陵祭　五社御稜ニ於テ大正十二年ヨリ祭典ヲ執行ス」・『祭典ニ関スル書類』（村社桐原石部神社社務所蔵）

〔参考引用文献目録〕

ア　青柳清作　1979　『寺泊の歴史』

オ　岡本郁栄・金子拓男・家田順一郎・高橋陽子　1977　『寺泊・出雲崎』新潟県文化財調査年報第16　（新潟県教育委員会）

カ　風間正太郎　1924　『桐原石部神社並神陵考』

金子拓男・駒形敏朗　1976　『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書（蛇山遺跡）』新潟県埋蔵文化財調査報告書第6　（新潟県教育委員会）

サ　齋藤彦太郎　1924　『桐原御神陵誌』（靈蹟古墳保衛會事務支所）

テ　寺村光晴・久我　勇　1960　『寺泊のおいたち』　（寺泊町教育委員会）

寺村光晴・岩本圭輔・吉井　功・安藤文一・石井克己・一山　典・斎藤国男・佐々木和博・波田野至朗　1977　『横滝山廃寺跡発掘調査概報（昭和51年度調査）』（寺泊町教育委員会）

ト　戸根与八郎・千葉英一・家田順一郎　1978　『国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書（五分一稲場遺跡）』新潟県埋蔵文化財調査報告書第14　（新潟県教育委員会）

フ　藤岡謙二郎　編　1975　『日本歴史地理総説　古代編』　（吉川弘文館）

〔付　編〕

『新潟県神社寺院仏堂明細帳』

（部　分）

〔付　編〕

『新潟県神社寺院仏堂明細帳』部分

一、本編では『新潟県神社寺院仏堂明細帳』（以下『明細帳』）のうち、本報告書に直接関係した寺泊町下桐所在の相原石部神社二社分と、和島村上桐所在の桐原石部神社分、計三社分を掲載した。

一、『明細帳』の記事等には、届出時の原文に加筆されている。

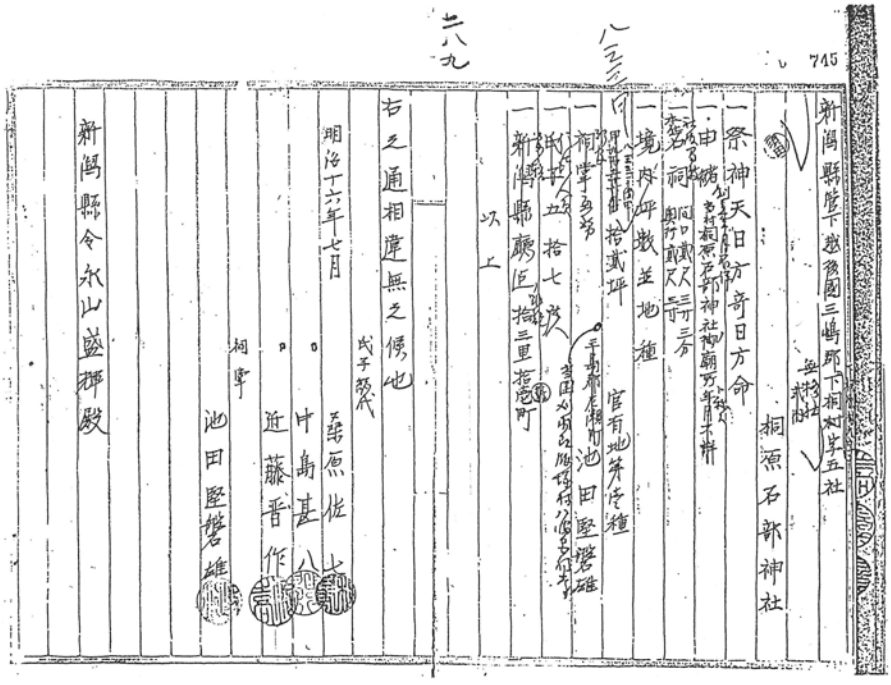
（一）　楷書体の記事は届出時の原文で「墨書」であるが、上桐所在社の「祭神」の項までの「文」のみ「朱書」である。

（二）　行書体等の欄中・欄外の記事及び抹消線は「朱書・朱線」で、一部「墨書」を混じえる。須田氏認印とともに、当時の新潟県社寺掛での加筆・押印と思われる。

一、『明細帳』は現在、新潟県総務部県史編さん室の所蔵となっている。

＊二〇一八年十一月現在、新潟県総務監理部　法務文書課の所蔵となっている（二〇一九年八月補記）。

寺泊町下桐所在　桐原石部神社御廟所明細帳



745

新潟縣管下越後國三島郡下桐村字五社

桐原石部神社

一祭神天日方奇日方命

一境内坪數並地種

官有地第壱種

拾貳坪

一祠掌多弟

池田堅磐雄

一新潟縣廳距離三里拾町

以上

右之通相違無之候也

明治十六年七月

桐原佐七

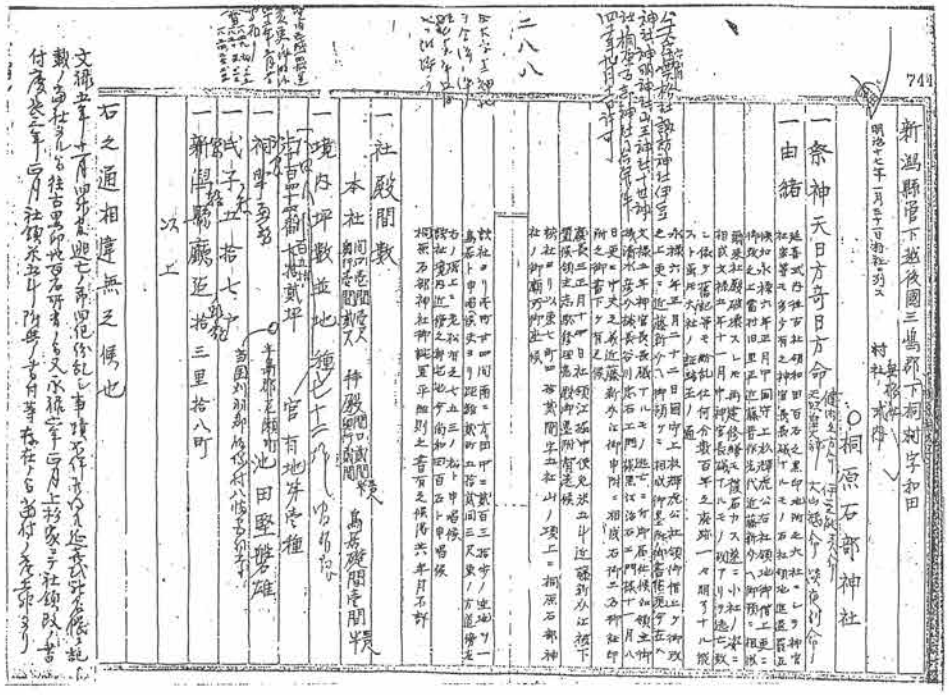
中島甚八

近藤晋作

池田堅磐雄

新潟縣令永山盛輝殿

寺泊町下桐所在　桐原石部神社明細帳（一）



新潟縣管下越後國三島郡下桐村字和田

明治十七年一月三十日調社掌

村社　桐原石部神社

一　祭神　天日方奇日方命

一　由緒

一　社殿間數

本社　間口　奥行　建坪

一　境内坪數並地種

一　神樹

一　氏子戸数

一　新潟縣廳迄

以上

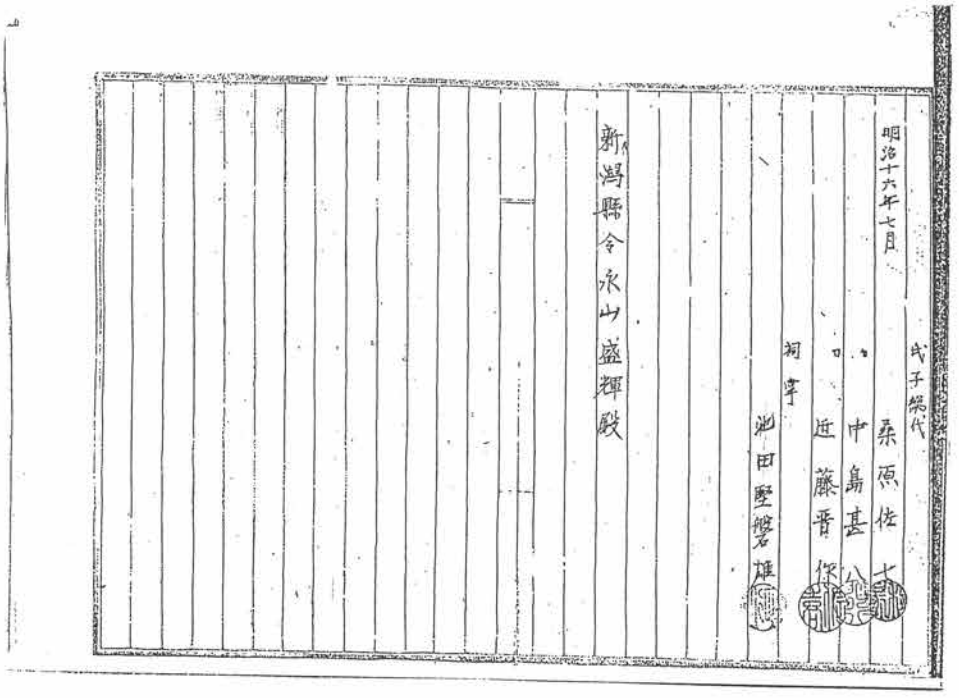
石之通相違無之候也

文禄五年十月甲午若狭国住人[illegible]

[illegible]

付度慶長三年四月社領[illegible]

寺泊町下桐所在　桐原石部神社明細帳（二）



明治十六年七月

弐千餘代

桑原佐七

中島甚八

近藤晋作

桐村

池田壓磐雄

新潟縣令永山盛輝殿

271

新潟縣管下越後國三島郡上桐村字桑名シデノ木　桐原村大字

○越後國、和名抄ニコシノミチノシリノクニ古ハ越前加賀能登越中越後ハ吾ノ
一國ノ稱ニシテ總テ高志ノ國ト云ヘリキ此国ノ名越後ノ国ニ古志郡アレバ神ノ
初ニ越ノ名ヲ失ヨリ出タル○三嶋郡　和名抄ニ美玉末神名式ニ古志郡トアル古ハ
古志郡ナルヲ何トノ御代ノ頃ヨリカ古志郡ヲ割テ古志三島ノ二郡トナシ三島
郡ヲ刈羽郡トナシキ○上桐村　古ハ桐原里ト云ヘシヲ後上桐原村ト称フ三島郡大
川津村常禅寺ニ所有ノ文献ノ内ニ慶長拾貳年三月吉日越後国三島郡
ノ内西古志庄上桐原村惣道場常住物也又寛永六己巳年十月十六日越後国三島
郡上桐原村御検地帳モアリ是上桐原村ノ證ナリ寛永ノ後原ノ字ヲ削リ
唯上桐村ト称フ原ノ字ヲ削リシ年号ハ詳ナラズ然ハ仮字ニテ桐ノ字ニアラズ
霧ナリ何トノ故ヨリ霧ヲ桐ニ誤リ作リシ者カ詳ナラズ○字桑　此宮ノ社林
ヲノ社ノ大前ニ大木アリ又其實ノ生ヘシカ同シ社ノ傍ニ中木アリ古ヨリ代々生ヘ
變リ來ヘアリシ故字ニ名附ケセシモノナリ寛政ノ頃マデ此大木ヲ何木ヤラ知ル人
ナカリシ或人此枝ヲ折リ持チテ三條町ヘ行クツイデニ彼ノ町ノ物知リ人ニ
見セマクトテ行キシニ道ニ一翁ニ合ヘ翁ニ云フ珍ラシキ木ノ枝ヲ持チ來ラレシ
其人云フ此木ハ何木ナルヤト問ヘシニ翁云フ是ハシデノキナリ至リテ珍ラシト
云ヒ去リシガ何處ヘ行キケルヤ知レズ夫ヨリシテ古ヨリ傳ヘ来シ字ノ此木ノ名
ヨリ出タルヲ知レリト古老ノ口碑ニ云フ漢字桑ノ字ニ當ルカ山海經ニ云フ
雲雨之山有木名桑黄本赤枝青葉云々如何カ取リガタシ

村社○　○桐原石部神社

桐原桐ハ上桐ノ所ニ云ヘシ如ク霧ノ字ニアリシヲ何レノ頃ヨリ誤リ書キ来シモ
ノカ古キ書トモニ如此漢字ノ當テ誤リマヽアレバナリ原トハ廣ク平カナル處ヲ
云フ高天原海原野原河原ナドノ如シ其外ニモ何原ト云フコト多クアルナリ
桐ハ霧ニテ霧原ト云フコトナリ神名帳考證ニ桐ハ書通原祝セトアレド既ニ
足ラザル説ナリ古事記文等ニ彼ニ云伊邪那岐命詔曰吾所生之国唯朝霧而
薫満哉詔之而於吹撥之御氣成坐神ノ名志那都比古神次志那都比賣神
此者風神也云々是ハ風ノ神ノ生レ坐シ坐ス前キヲ古ナレバ秋霧ノ深ク立チタ
レシハ云ムカナシ何トノ国モ同ケレド中ハ薄霧ナド棚引居ルモノナリ開ケ行クマヽ
ニ霧モ薄ラグナリ今ニ然ナモ此海道ノ開ケヌ国ハ霧ノ立ナモリ由ニ傳ヘ
聞ケルサモアルベキコトナリ○石部トハ海ノ磯ノ邊ト云フコトナリ古ハ此里ノ辺ハ
海ナリシコト疑ヘナレ文政ノ頃御社ノ傍ヨリ又イ方ノ辛夷ヲ隔テ、柏沢彌吉エ門井
ヲ掘リシニ下ヨリ貝ノ殻多ク出レ又ガスエノ土器ラシキモノ、由嗣子孫平語リキ
明治七年ノ御社ノ傍ヨリ子平ノ間百三十間余ヲ隔テヽ、字板ヲ禁ヤムトテ周囲ニ
堀ヲ掘リシニ五尺バカリニシテ貝売ノ出シトコロモアリ此辺ノ字ヲ茶戸ト云フ戸ハ
門ニテ水門ナドノ門ナリ彼ノ荒々シク打寄スル門ト云フコトナリ是ヲ以テ御社ノ
ワタリハ石部ナルコトノ證シトスサテ霧原石部神社ト称エルコトニテ高志国

1548

和島村上桐所在　桐原石部神社明細帳（一）

ネノ開ケズシテ秋霧ノ原ニ棚引キ居リケル國ニ天降リ坐ス神ニ坐ラスナハナ高志
ノ国ノ神祖ノ神ニ坐々キ様リ考ヘ奉ルニ大神以辺リヘ天降リ坐ス秋霧ノ棚引ク原
カモト知ヱヘシテ霧原ノ里ト此ノ御ニ付レモノナラムカ古記ノアリシヲ古社宮
火ノ災ニ罹リ失フト云フ傳ヘアリイトモヽナゲカハシキコトナリ

一祭神不詳　或云天日方奇日方命

天日方奇日方命ト称奉ルト考アルニ神名帳考證ニ云天日方奇日方
命也又姓氏録ニ云フ石辺公大物主命男久斯比賀多命ハ然也トアルニ
ヨリテ称エ奉リテ里々古ヨリ傳ヘアリシニハアラズト思ハル必ス中古ヨリノ称
辞ナラムカ天津神国津神多ノ中ニ三ノ古典ヨリ司出レ拵説ヲ以テ
祭神ヲ申シ上奉ルトハ恐レ多キコトナリ越後ノ国ニテハ風土記モナケレハ祭
神ヲ知リ奉ルニ由ナシ強テ其神ニ坐シ坐サルヲ称エ奉ルハ恐レ多キコトヨリ
御社ノ御名ヲ称申シエル方イタリテ宜シト考フ

一由緒

創立年月不詳　○新潟縣旧四大區小六區ノ
産土神○明治四年十二月柏崎縣ニ於テ三島郡
ノ郷社トナシ給ヘ祠官三島郡東方村廣川
九郎右衛門外祠掌六人ナリ明ル五年十二月郷社
御廃止ニ相成リ明ル六年十二月十七日村社ニ列セ
ラレ給ヒ時ニ上桐村神澤八十太郎祠掌ノ職ヲ
襲ク明治元年十月中破壊明ル二年五月再建
○越後国式内神社案内ニ云（天明七年丁未十二社前神主藤原氏重国ノ中ノ式内ノ神社ヲ拜ニ廻リ給ヘシ祈リニ詣サレシモラタキコトニセ）桐原石部神社（古志郡当時三島郡ニ属ス島崎村ヨリ東ノ方拾五六町計上桐）
村社頭子ノ方ヘ向産子居宅北ニ有リ里民云古ハ神
領五百石有リト鳥居ハ村下拾四五町ヲ経テ有リ
西ロ鳥居ハ嶋崎村ノ境ニ有リト今テハ両方共ニナシ

創立年月不詳　当村ノ産土ナリ明治元年十月破壊同二年五月再建　同四年十一月廿日柏崎縣ニ於テ郷社トシ同五年十二月更ニ四大區六小區ノ村社ニ列ス　当社ハ延喜式神名帳ニ記載ノ古志郡桐原石部神社ノ社

1549

和島村上桐所在　桐原石部神社明細帳（二）

往古ハ此ワタリ古志郡ナリケルヤ云々

○古老ノ口碑ニ云古ハ春秋二季ノ官祭アリ春ノ祭日ハ三月十吉（孫斉神社ノ傳ニ有桐原神社年々神年数祭之此日ヲ云フ歟）秋ノ祭日ハ知レズナゲカハシキコトナリ

○古老ノ口碑ニ云フ古大旱魃ノ續キテ公民迄キモ達キモ食餌ヲ絶レ憂ヒ悲ミ居リシニ五月十四日（神祭前ノ日）大雨降リ皆々手足ノ置ク處ヲ知ラズ喜ビ里人悦ビノ餘リ稼ヲ拵ヘ大神ニ捧ケ献リテ祝ヒシトゾ夫ヨリ例トシテ今ニ至ルマテ五月十四日ニ稼ヲコシラヘ大神ヘ捧ゲテ祝フ

是天ノ下ノ青人草ノ取リ作ル五ツノ穀物ヲ惠ミ給フ遺ルトコロノ証ナリ（延喜式神名帳桜井ニ云フ者ニ相當ル部神社五穀成就ノ神云々）

○源甕旌ノ長歌ニ曰

桐原石部大神大御慈　源甕旌雄詠

味酒乎上桐乃里王与春孫万部乃宮八神加良之今在
良之山仰運斯神沙歌奴良之畏母坐神毛今母坐
神鴨神沙比豆立孫百木由白樹實乃獨奴氣出豆
彌高ニ小田加久刀布水樹乃立栄卞毎年ニ志百
二茂豆貴人乃氣世孫衣乃須曽王在小田乎於本問
例大賓曽古乎葉土石久夜春畏神乃水垣俤掛

根ニ之有伐世年春激乃哆乃伎不有乎今夜宮屋乃
御門鳥網張沙鶴之玖之有伐志百二生孫中蝦取卞
四美立孫志李乎採豆人美南乃安閑岐万爲孫乎
柄澤乃翁命乃思金畏計署豆梓弓心振起之
御門乃荒草木乎仰伎波良比拂浄豆安氣久毎
登布金乃玉取豆万乃美波新衣万立曽例乃手人
二意賓世卞加哆羅二酒惠豆玉乎問之事乃衣岐
函乃瓶乃波良滿並卞大前二麻陀之之神柄乎
頂ニ伊南多枳持豆玉保鶴比壽奴孫閑ニ衆乃
於畏由留尤右手ニ雷音乃聲尤右天地ニ南里乃土
保吉之玉匣田面於保激孫神木乃屑母吹祢伐比多
土能佐久水無月尓奇波四久安夜之久毋有可朽業
世受空保母奈記乎折伏之玉四畏如計　志心天賓
御門仕孫曽古乎之母悦玉比神南鶴運民乃葉乎
思四之御心奈良之乃曽玉閑婆久ニ今久言万登業
由由之畏久伊萬者仰微歌母（充十餘リ二トセトイフ年ノ水無月ノコトナリ）
豆御稜威ノ高坐之遺ル處ノ證ナリ

○桐原石部神社ヨリ北ノ方拾四五町餘ヲ隔テ御賀村
上桐村トノ地界ヲ往古ヨリ字桐原境ト称来レリ
コハ明暦年中御本村御検地帳ニ記載有之是又

テ考奉ルニ前ニ掲ゲシ神領五百石ノアリシコトハ
疑ヲ容レザル處ナリ
○金地額一面
表ニ桐原靈神ト墨ス東ニ安政四巳年神夏往四
位下藤原信親書トアリコハ當国村上城主内藤紀伊守
藤原信親殿菅帝府老中在勤中寄附サレシ
モノナリ
○石碑一基
文久二壬戌年孟夏從五位下若狭守源朝臣
太清殿ノ筆ナリ

一社殿間数
本社　間巾四尺　東西四尺
拜殿　間口弐間三尺　奥行弐間
中殿　間口壹間　奥行弐間
鳥居礎間九尺

境内坪数并地種
境内坪数弐千壱百九拾九坪弐合
内壱千六拾六坪　官有地第一種
内壱千六坪　民有地第二種

境内神社壹社
○桐原神社
後戸一社
由緒　安政三年六月十五日創立
安政三年以前此村時々疫癘セシガタマ〳〵神

アリ其神託ニ曰我ハ是後戸ノ神ナリ我祀慶
絶シテ久ケドモ誰モ興サムト欲スルモナシ是疫癘
流行スル所以ナリ今速ニ我祀ヲ中興スベシ然ラサレハ
疫癘猶益流行シテ村長以下悉ク死セムト詔給
ヘリ是ヲ以村民等大懼シ相謀リテ建シ所ナリ
本社　間巾三尺　奥行壹尺
一神官
祠掌　手島郡上新村　桐澤八十太郎
一氏子惣代　小黒平六　小黒彦平
一信者戸数　小黒平六　小黒彦平
一信者居住距離拾弐里三十町拾五間
以上
右之通相違無之候也
明治十六年六月三十日　氏子惣代　中村治平
小黒平六
小黒彦平
祠掌　桐澤八十太郎
三島郡桐島村大字上桐
字橋沢一七七三番　山林　四畝弐歩
新潟縣令永山盛輝殿

遺跡遠景（手前の山頂部が遺跡）　S→N

遺跡近景（樹木が密生していた）　SE→NW

発掘調査前(1)（方形壇状を呈している。）　N→S

発掘調査後(1)（不定形な地山面）　N→S

発掘調査前(2)　　E→W

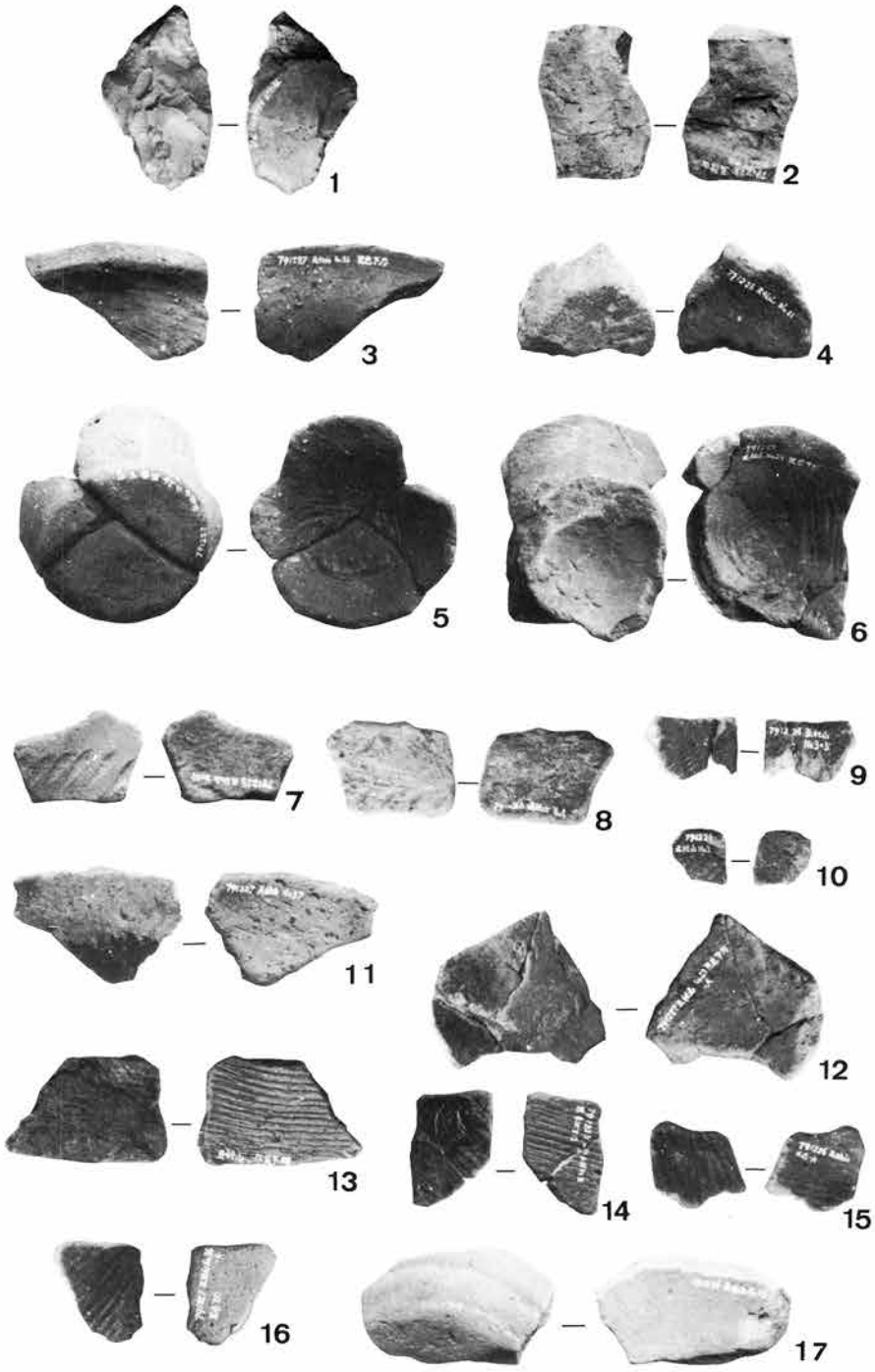
発掘調査後(2)　　E→W

発掘風景(1)（白線部がＮＳライン）　NE→SW

土層状態（ＳＮライン）　E→W

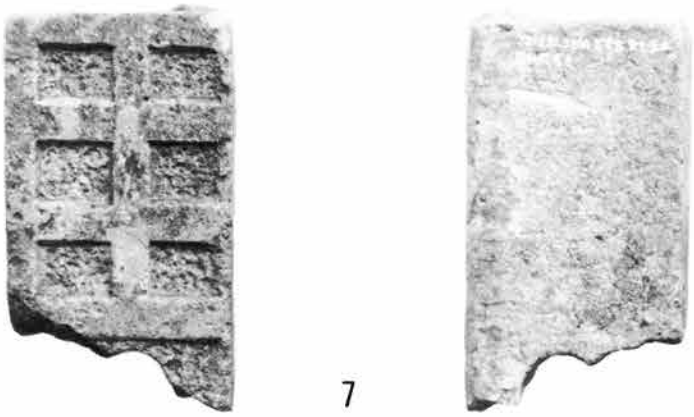
発掘風景(2)（竹櫛は，８層出土の土師器）　　N→S

遺物出土状態（NW区７層上面より寛永通宝が出土）N→S



遺　物(1)（縮尺　½）

1 2 3 4 5 6



7

8

遺　物(2)（縮尺　½）・石祠

新潟県埋蔵文化財調査報告書第23

国立寺泊療養所建設

埋蔵文化財発掘調査報告書

桐原石部神社御廟所

昭和55年3月25日 印 刷
昭和55年3月31日 発 行

発 行　新潟県教育委員会
印 刷　長谷川印刷

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第23 正 誤 表

新潟県教育委員会

P・L	誤	正
P.4　L.4	挾	挟
P.6　L.7	している。〔註1〕	している〔註1〕。
P.10　L.14	2.土師器	2.弥生土器・土師器
P.12　L.8	石川でいう	石川県でいう
P.12　L.8	月影II式	月影式
P.15　L.23	や・このたび	や，このたび